

会話型AIと可観測性基盤を活用した 現場トラブルシューティングの実践



株式会社 システムリサーチ

企業情報

会社名	株式会社システムリサーチ
本社所在地	〒453-0861 愛知県名古屋市中村区岩塚本通二丁目12番
支社	東京支社・大阪支社
営業所	札幌営業所・仙台営業所・福岡営業所
設立	1981年3月（2026年度：47期）
従業員数	1,757名 ※2026年4月1日時点・連結
証券コード	3771（東証プライム市場/名証プレミアム市場）

製造システム 3 部

桑原 武志（Takeshi Kuwabara）

- ✓ 2023年入社（4年目）
- ✓ Webアプリ開発業務を主に担当
- ✓ 自身が開発したアプリの監視運用 始めたて

1

障害対応における初動調査の課題

2

会話型AIと可観測性基盤を組み合わせた調査アプローチ

3

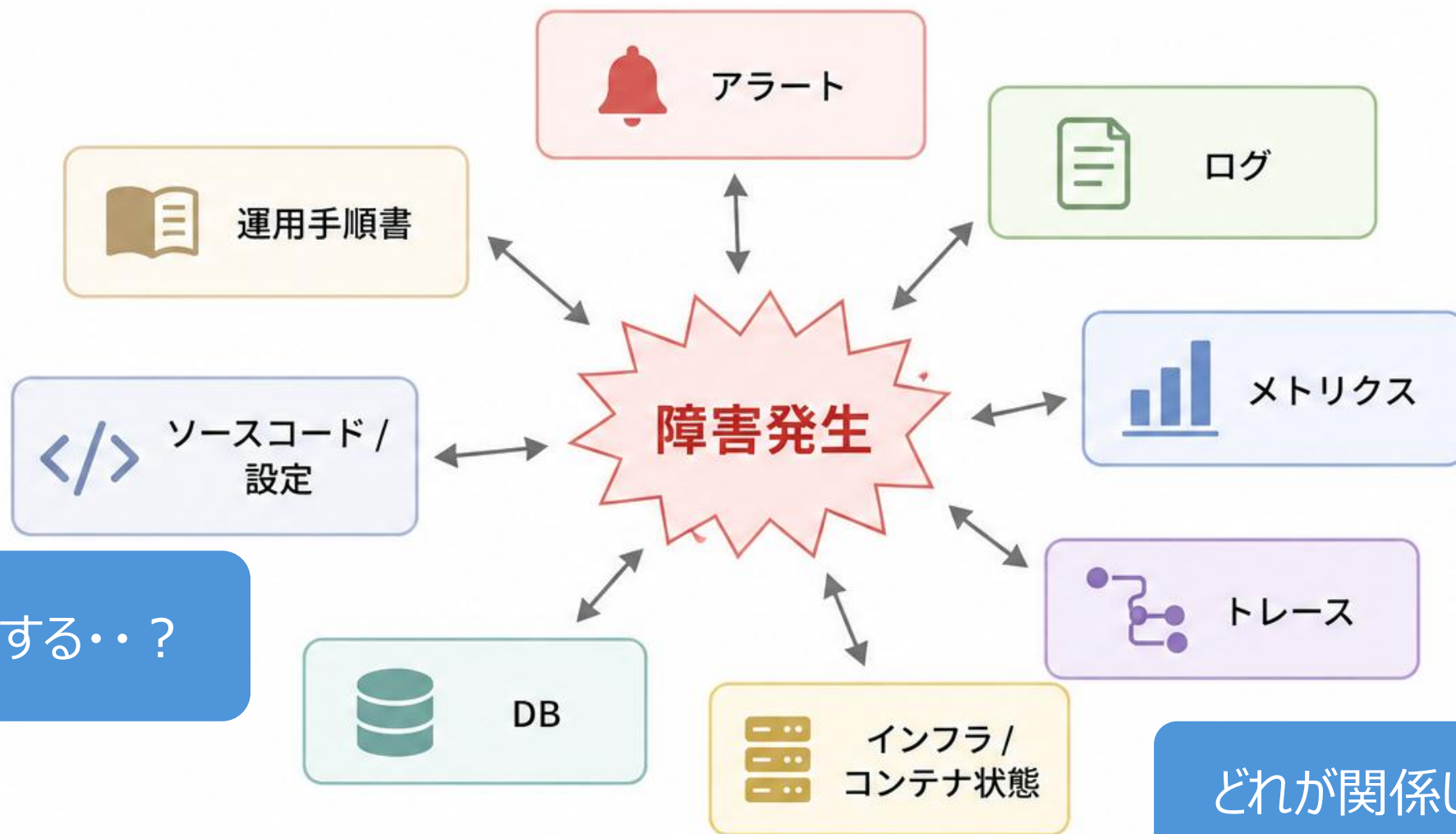
実運用におけるトラブルシューティング手順

4

活用して見えたメリットと限界

情報の分断

何をどのように見ればいいのかわかりづらい

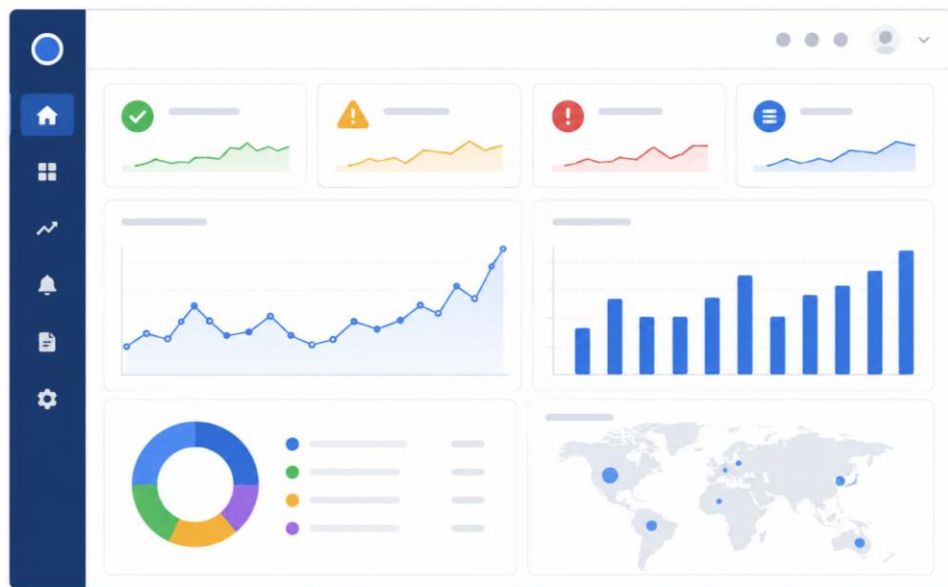


どこで確認する・・・？

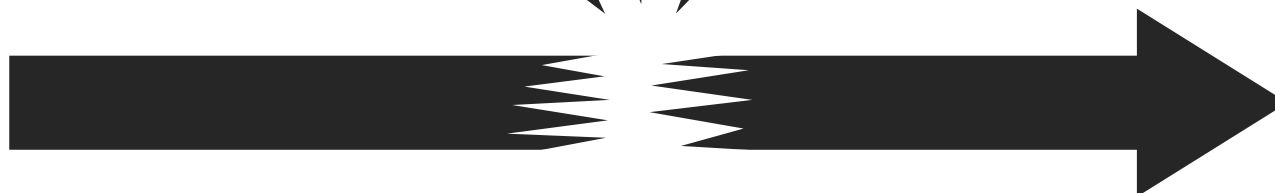
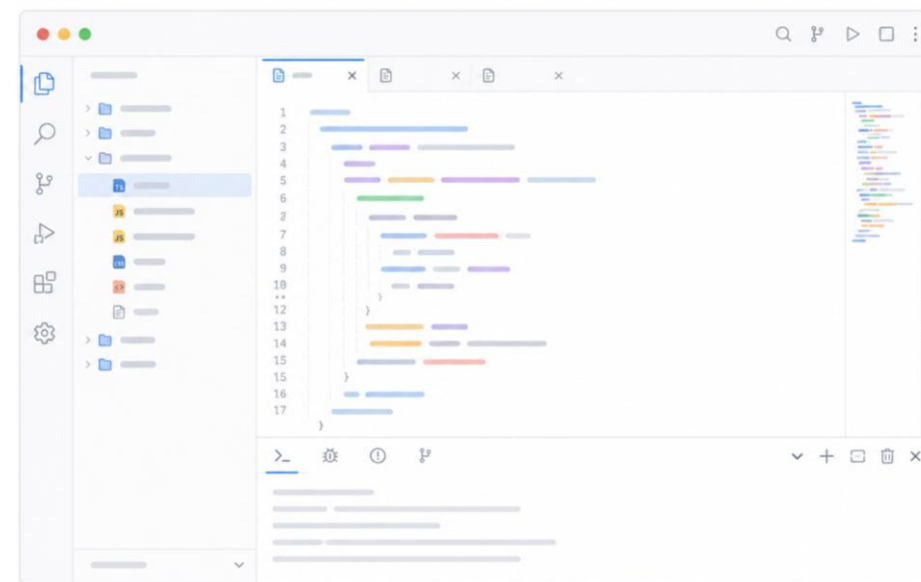
どれが関係している・・・？

環境の分断

監視画面（運用）



IDE



監視画面で異常がわかって、その情報をコードや設定調査へシームレスに繋ぐことが難しい



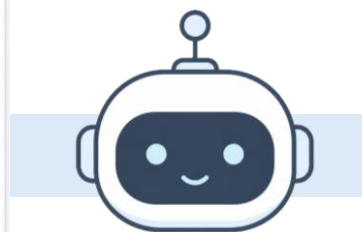
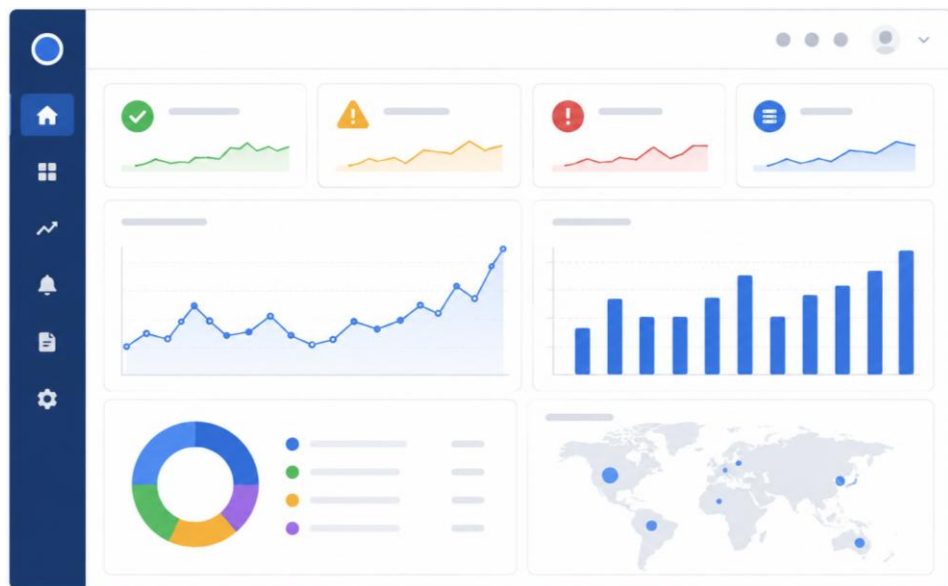
課題

- 調査対象が複数レイヤーに分散している
- 初動で「どこから見るべきか」の判断コストが高い
- 監視画面で得た情報をコード調査に繋げにくい
- 結果、調査が属人化しやすい

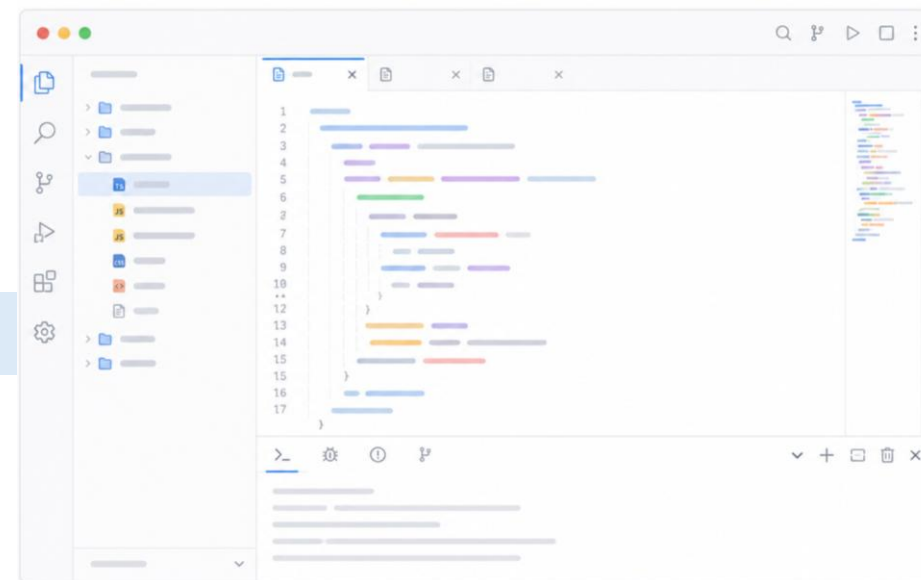


分断した情報・環境を繋ぐことができれば効率化できる？

監視画面（運用）



IDE



情報を一元管理できる基盤

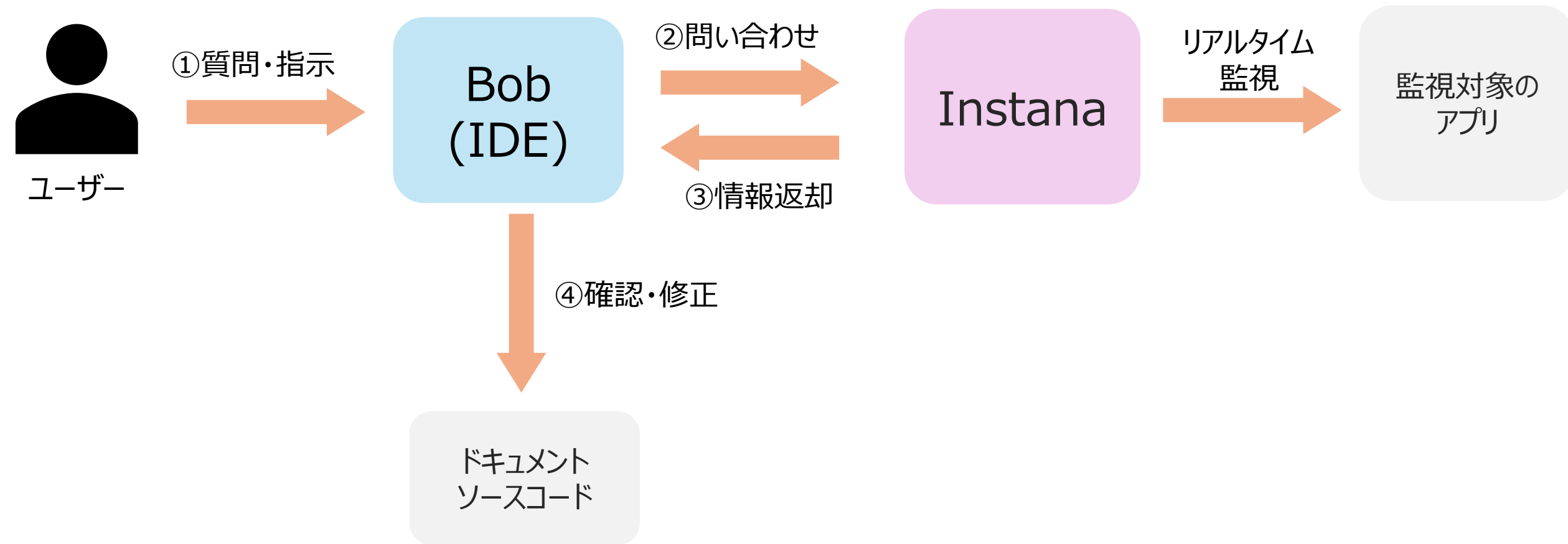


情報を解析・要約するAI

要素	本セッションでの位置づけ	主な役割
Instana	可観測性基盤	ログ・メトリクス・トレース等を一元管理 異常の兆候や影響範囲を把握する
Bob	IDE内で利用する会話型AI	調査観点の整理、取得した監視情報の要約、 コード確認への導線づくりを支援する
MCPサーバー	AIと外部情報源を接続する中継層	Bobからの要求に応じて、Instanaなど外部情報の取得を仲介する

	Instanaのみ	Bobのみ	Instana+Bob
システム状況の把握	○	×	○
コード理解	×	○	○
状況を踏まえた対話	×	×	○
調査の入り口	人が考える	人が考える	AIが整理を支援

調査の入り口のハードルを下げることを特に重視したため
2つのサービスを組み合わせることに



1

異常を検知

アラート/メトリクス変化
問い合わせ受付

プロンプト例

- ・遅延が発生しているので原因を調査して
- ・影響を受けているサービスを整理して

ざっくりとした質問でも問題なく動作した

2

Bobに問い合わせ

3

Instanaをもとに Bobが原因を回答

5分もかからない程度で
調査が完了した

4

IDE上でシームレスにコードや 設定の確認・修正へ繋げる

コードに問題がある場合、そのままBobに
処理を修正してもらうこともできた

これらすべての手順が同一の画面上（IDE）で完結する



課題

- 調査対象が複数レイヤーに分散している
- 初動で「どこから見るべきか」の判断コストが高い
- 監視画面で得た情報をコード調査に繋げにくい
- 結果、調査が属人化しやすい



結果

- 一元管理できるようになった
- 入り口は常にBobで固定
- 画面を変えずにそのままコードを修正可能
- 新人でも原因調査が可能に

導入したことで感じたメリット

初動調査の着手が早くなる

- 何を見たらいいかわからない状態からでも作業を開始できる

ツール横断の負荷が下がる

- 監視情報の確認からコード調査まで導線が繋がっていて作業効率があがる

調査内容を共有しやすい

- Bobの機能で一次報告のたたき台を作りやすい

限界

AIの回答だけで完結はできない

回答をそのまま採用するのではなく、ログ・メトリクス・トレースで裏付けが必要

Instanaの整備状況に大きく依存する

Instana側での細かい設定が必要

Instanaが拾っていない障害はBobで確認することもできない

「情報を探す時間」から



「状況を理解し、判断する時間」へ

会話型AIと可観測性基盤の連携は、
人がより本質的な「高度な判断と解決」に集中できる環境をもたらします。

ご清聴ありがとうございました